様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２８６

研究課題名（和文）発達障害のある大学生に対するコミュニケーション教育法の開発

研究課題名（英文）The development of a method for teaching communication skills to those

研究代表者
西村　優紀美（NISHIMURA, YUKIMI）

富山大学・保健管理センター・准教授

研究者番号：８０２７２８９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高機能自閉症スペクトラム障害者の社会的コミュニケーション能力を促進し、優位な認知特性をコミュニケーションツールとして活用するプログラムの開発を目的とした。自閉症スペクトラム障害の特徴であるコミュニケーションの困難さは、彼らが「場のコンテクスト」を作り出す主体者としての役割を担う場合、コミュニケーション上の問題は起こらないのではないかという仮説に基づき、当事者が主体的にコミュニケーションプログラム開発を行った。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to develop a programme to enhance the social communicatio n and interaction of those students with high-functioningautism spectrum disorder (HFASD) by utilizing the ir particular cognitive skills.
This will be based on a hypothesis that there should be no such communication difficulties for individuals with HFASD if they themselves take the initiative in generating The"context of the occasion".

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：発達障害

## １．研究開始当初の背景

我が国では2007年度より小・中学校の通常学級における特別支援教育がスタートし、知的な発達の遅れがないＬＤ・ＡＤＨＤ・高機能自閉症等の発達障害児に対する教育的支援が開始された。　その状況の中で、社会性を育てるための具体的な方法を学ぶ方法としてソーシャルスキルトレーニング（social skills training：SST）が行われることが多い。現在行われている発達障害児・者へのＳＳＴは、小集団による社会的場面を作り、その場で実際の社会的体験を積む方法論が主流となっている。しかしながら、高機能自閉症スペクトラム（ＡＳＤ）の特性に対するＳＳＴの効果は、現在行われている方法論では有効性に疑問がある。つまり、ＡＳＤの人々が持つ「社会性」に関する特徴には、「人への関心が薄い」、「人との距離感が取れない」というような社会的相互関係における感じ方の違いや情報のキャッチの仕方の違いが根底にあるがゆえの困難さがあり、その特徴を踏まえた社会性を向上させるプログラムが必要である。さらに、さまざまな年齢層にも適応し、対人交流面で特徴があるＡＳＤにとっても有効なＳＳＴの開発が求められている。

従来のコミュニケーション指導における問題点は以下のように整理できる。これまでの指導は、「コミュニケーションの弱みに焦点化されたトレーニングに終始したものが多く、指導場面として用いられるのは、日常の社会的対人場面を切り取った一場面への対処法に対する指導になっており、刻々と流れている生活の中での困りごとを抱える当事者のニーズに対応していない。田中は、「ＳＳＴは適切な社会的相互作用と安定した対人関係を築く技能を育てるという点には異論はないが、何かしら『欠点を改める』、あるいは『落差を埋める』という視点を感じる」、また、「『技法に引きずられその人を不在にしてしまう』という視点は常に留意すべきことである。」、さらに、「時にその人にとってセッションのみに有効で、最も現実味のない指示に陥り、バーチャルな成功体験を付与することになりかねない」とＳＳＴが陥りがちな点について指摘している。これらの見解は、けっしてＳＳＴが必要ないといっているのではなく、支援者側の教えたいことが先行してしまい、当事者の実感としてある社会性やコミュニケーションの問題を通り越して、技法ばかりが前面に出てしまうことへの警鐘である。このような問題をできるだけ解消するために、ＳＳＴに必要な観点は、①生まれながらに持っているかけがえのない宝を一人ひとりの中に探っていき、それを掘り起こすこと、そして、リアリティを大切にし、社会的スキルが発現しやすい状況づくりをすることが重要である（田中2008）。②困る行動を矯正するようなプログラムは効果がなく、むしろ、「一緒にやると楽しい」、「できることは嬉しいこと」というポイントを押さえたコミュニケーションワークショップでないと有効な体験はできない(辻井)。③ＳＳＴは集団行動をするためのスキルを学ぶためではなく、自分の長所と苦手なところ、他者との違いを理解し、お互いの違いを尊重して協調するプロセスが重要であり、自己理解と自己尊重が基本である(高山2008)。

【引用文献】

田中康雄：発達障害とＳＳＴ，本人家族のためのＳＳＴ実践ガイド．こころの科学，2008.

高山恵子：セルフエスティームを育てるＳＳＴ、本人家族のためのＳＳＴ実践ガイド．こころの科学，2008.

## ２．研究の目的

本研究は、高機能自閉症スペクトラム障害者の社会的コミュニケーション能力を促進し、優位な認知特性をコミュニケーションツールとして活用するコミュニケーションプログラムの開発を目的とする。自閉症スペクトラム障害の特徴である社会性・コミュニケーションの困難さは、彼らが「場のコンテクスト」を作り出す主体者としての役割を担う場合、コミュニケーション上の問題は起こらないのではないかという仮説に基づき、当事者が主体的にコミュニケーションプログラム開発を行う。

## ３．研究の方法

本プログラムは、小集団によるグループワークを基本においたワークショップ形式で行う。全体を通した特徴は次のような事柄である。まず、このプログラムはＡＳＤ当事者だけでなく、すべての参加者が持っているそれぞれの認知特性が活かされると共に、個性が融合する心地良い交流の場を提供することである。また、参加者が自分自身の感覚に気づくことや、自分自身の創造性を掘り起こしていく作業を行い、コミュニケーションのもとになる他者との双方向の関係性を育てていくものである。また、開発に当たっては企画の段階からＡＳＤ当事者の方と話し合い、実践と振り返りを行いながら、活動を繰り返し、内容及び方法論を創りあげていくというプロセスをとった。

(1)対象者

対象者は、アスペルガー症候群の診断のある当事者と表現活動に関心のある方（幼稚園、特別支援学校、大学、専門学校等の教員・高齢者施設職員・学生）を含め、計9名である。

(2)ファシリテーター

ワークショップのファシリテーターは研究代表者と臨床音楽家の２名が行い、活動後のシェアリングも行った。ワークショップの最後には、当事者がファシリテーターの役割をとり、研究代表者と臨床音楽家がアシスタントの役割を担った。

(3)実施場所

メンバーがゆっくり活動できる空間があり、周りからの騒音が遮断できる静かな場所を設定した。

(4)実施期間

ワークショップは、全10回で、1回２～４時間行った。4時間の場合、２時間の活動を行ったあと、シェアリングに２時間とり、それぞれの感想を聴き、意見交換を行った。2時間の場合、後日シェアリングの時間を取り意見交換を行った。

(5)手続き

メンバーは、毎回活動が終わった後にワークに関するシェアリングの場を持ち、それぞれの感想を言う機会を持った。また、参加者が当事者の感想に対して思いついた意見や感想を返し、ワークショップの場の透明性を図った。

(6)プログラム

10回のプログラムは、大きく分けて次の４つである。

①言語・非言語的コミュニケーション：出会いのワークショップとして行うウォーミングアップ的な内容である。参加者同士が親しくなり、リラックスをした状態を作り出すことが目的である。身体を動かし、他者と接触する機会の多い内容を準備した。これらはワークショップの開始時に毎回繰り返し実施した。ただし、細かな活動内容は、少しずつ変化させていく。

②知的素材によるコミュニケーション：ＡＳＤの優位な特性を象徴する素材を選び、活動を展開する。たとえば、「数字」「写真」「絵画」「顔マーク」「習字」などである。

④当事者によるコミュニケーションリーダー体験：当事者がこれまでのワークで行ったことをもとにワークショップを組み立て、ファシリテーターとしてワークショップをリードしていく。

４．研究成果

(1)当事者の感想

①言語、非言語的コミュニケーション

ファシリテーターの解説で活動の意味が理解でき、聞いた後の方が安心して取り組むことができた。同様に、参加者からの説明や感想も自分を振り返る機会になった。

②知的素材によるコミュニケーション

数字に対して私は小さい頃から愛着心があり、よく電卓で遊んでいた事があった。また、自然科学にも興味があり、それに関係する数字はどんどん吸収して覚えていった。数字に関するブレインストーミングの活動では、数字をキーワードに参加者全員で作成した。自分からイメージを拡げていく事がなかなかできなかった一方、他の参加者が広げていく様子を見て、皆の発想力の豊かさがとても刺激的だった。

③コミュニケーションリーダー体験

当事者がコミュニケーションリーダーと

違った者同士がお互いを理解しようとしていることが大切であり、だからこそルールがなくても、違う考えの相手を自然と理解することができたと思います。このコンセプトは同時にワークショップ全体の士気を高めていると思いました。コンセプトを理解している人たちの集まりだからこそ、自分も仲間に入ることができ、自分自身を表現しようとする気持ちになれた。

④まとめ

ワークショップ等、参加型の活動の中では、グループダイナミクスの変化が非常に重要な意味を持つ。それはファシリテーターが操作的につくり出すものではなく、また、一人のリーダー格の参加者が単独でつくり出すものでもない。つまり、グループダイナミクスは、参加者の自発的な言動、雰囲気、環境によって全員で創造していくものであり、そういう意味でも、今回のＡＳＤ当事者と共に体験した活動は、ワークショップのあり方の原点を示してくれたと言える。今回採用した表現活動のメニューは、唯一決まった正解というものがなく、それぞれの参加者が感じたままを表現することに価値があるものだった。それぞれの人の解釈のちがいが、表現の多様性、個性的な創造力として受け止められた。特に、ＡＳＤ当事者が持つ優位性は、非常に創造性が高いものとして称賛の対象になった。ＡＳＤ当事者自身も、普段の生活の中で当たり前だと思っている感覚や表現が、非常にクリエイティブなものであると評価され、その狭くて深い認識、鋭敏な感覚が、表現活動において大きな称賛の対象になる体験をすることとなった。大切なことは、自分自身の特性を自分自身の個性や良さとして実感することであり、我々指導者に求められるのは、実感できる場を豊かに提供することである。

今回の目的はＡＳＤ当事者の優れた認知特性を活用したコミュニケーションワークショップの開発ではあったが、それは当事者に限られたものではなく、すべての人がそれぞれに持っている特性を尊重することでもあった。すべての参加者が「承認する」「承認される」という双方向の承認行為を実感し、自己存在感を味わうことができた。ワークショップ形式の表現活動は、自分が人に喜びをもたらし、影響力を及ぼすことができる体験であり、自己肯定感、自尊感情を満足させることに導かれるものでなければならない。今回のワークショップは、その違いが一層際だつＡＳＤ当事者が参加

することによって、参加者同士がお互いの違いに注目することができ、お互いに認め合うこと、お互いの違いを尊重し合うことをより深く実感でき、さらにＡＳＤ当事者との対話を通して、自分自身の良さを大切にしていく必要性を感じ取ることができた。

リーダーの役割に関して、当事者はファシリテーターの言語的表現を厳密に解釈し、その結果、周囲の人々とのやりとりに戸惑いを感じている様子が見られた。しかし、その場のコンテクストが言語的に補足説明されることによって、テクストの意味が他者と共有され、了解することができ、他の参加者と共有したことによる安心感を得ることができた。「興味や関心、好奇心が勝ると、苦手意識が解消する」という当事者の言葉は、非常に重みのある言葉として受け取ることができる。

コミュニケーションワークショップは、高機能自閉症スペクトラムの認知特性を活かした活動を中心に計画・実施したが、当事者の特性を活かすだけでなく、それぞれの参加者が持っているそれぞれの認知特性も同時に活かす活動となった。ＡＳＤ当事者の写真は、彼自身の感性と視覚的美しさが表現されているが、それを通して、参加者それぞれの内側に持っている世界観が引き出されていった。当事者の撮った写真を見て、彼の語りに耳を傾けながら、触発されて表出してくる自分自身のイメージを、音や言葉に表していく姿がそこにはあった。最後にＡＳＤ当事者がファシリテーターとなった時に、参加者がそれぞれに創ったポエムがそれを表している。

大きなエネルギーを向ける趣味やこだわりの世界は、コミュニケーションにおいて妨げになるという考え方があるかもしれない。しかし、今回のワークショップでは、ＡＳＤ当事者のこだわりの世界を、他者とのコミュニケーションツールとして活用した。それまでは一人で楽しむ趣味の世界だったものを、人との関係性を築く媒介物として活用したのだ。誰でも、自分が大切にしていることを同じように大切にしてくれる人がいることは、大きな喜びであることには間違いない。趣味やこだわりの世界を共有して人との関係性を築くという方向性は、コミュニケーションを活性化させるために非常に有効な手法だと思われる。コミュニケーション教育法は、それぞれの解釈の違いそのものが尊重されるので、一人ひとりが持っている個性・特性が常にポジティブに受けとめられ、自分自身のオリジナリティが尊重される機会となり、自分がここにいていいという自己存在感を実感できるコミュニケーションの場となった。

５．主な発表論文

（研究代表者、連携研究者には下線）

〔図書〕（計２件）

①西村優紀美：学生相談の新たなテーマ－発達障がいの大学生支援　In　下山晴彦、森田慎一郎、榎本眞理子編　学生相談必携GUIDEBOOK.金剛出版、東京2011. 218-233.

②西村優紀美：大学における発達障がい学生への支援の在り方.In　長澤正樹編：現代のエスプリ；特別支援教育－平等で公平な教育から個に応じた支援へ.東京,2011.104-116.

〔雑誌論文〕（計８件）

①水野薫，西村優紀美：発達障害大学生への小集団による心理教育的アプローチ．学園の臨床研究 10.2011.51-59.

②水野薫，西村優紀美：発達障がい大学生への小集団による心理教育的アプローチ～

ナラティブの共有とメタ・ナラティブの生成～．学園の臨床研究 12.2013.19-27.

③西村優紀美，吉永崇史，水野薫：自閉症スペクトラム障害のある大学生へのピア・サポートの在り方～ピア・サポーター養成プログラムの開発～，日本 LD 学会第 20 回大会ポスター発表，2011.9.18.

④西村優紀美，斎藤清二，竹澤みどり，角間純子，山田真帆，吉永崇史，水野薫，桶谷文哲，松谷聡子，石村恵理：発達障害大学生に対するナラティブ・アプローチに基づく心理教育の実践研究，第 49 回全国大学保健管理集会，2011.11.19　山口.

⑤水野薫，西村優紀美：小集団によるコミュニケーションワーク「ランチ憩ラボ」活動. 日本 LD 学会第 20 回大会ポスター発表，2012.10.7　仙台.

⑥桶谷文哲，斎藤清二，西村優紀美，竹澤みどり，角間純子，山田真帆，廣上眞里子，吉永崇史，水野薫，松谷聡子，米島博美，田中裕子：発達障害学生の修学支援に丁寧にかかわることの意義について，第 50 回全国大学保健管理集会，2012.11　兵庫.

⑦水野薫，斎藤清二，西村優紀美，桶谷文哲，日下部貴史：発達障がい学生支援におけるメディエーションの意義と効果，日本 LD 学会第 22 回大会ポスター発表，2013.10.13　神奈川.

⑧桶谷文哲，斎藤清二，西村優紀美，水野薫，日下部貴史，松原美砂：発達障がいのある学生への多元的修学支援アプローチ，第 51 回全国大学保健管理研究集会ポスター発表，2013.11.13

〔その他〕

①富山大学学生支援センター　アクセシビリティ・コミュニケーション支援室サイト
http://www3.u-toyama.ac.jp/support/communication/

②電子教材
http://www3.u-toyama.ac.jp/gp07/e-index.html

○発達障害－他者の支援の理解
○アスペルガー症候群～当事者からのメッセージ「ソルトの場合」
○トータルコミュニケーションワークショップ～ＡＳＤの特性を活かしたコミュニケーション教育法の開発

６．研究組織

（１）研究代表者

西村　優紀美（NISHIMURA,Yukimi）
富山大学・保健管理センター・准教授
研究者番号：80272897

（２）連携研究者

斉藤　清二（SAITO,Seiji）
富山大学・保健管理センター・教授
研究者番号：70126522

吉永　崇史（YOSHINAGA,Takashi）
横浜市立大学・学術院 国際総合科学群 人文社会科学系列・准教授
研究者番号：40467121